

- :1-69.
- 3) 松井安俊・松井英子 (1989) 月刊むし225:4-9.
2. 鉢高原のオオウラギンヒョウモン
- 1) 近藤伸一 (1989) 日本の生物3(11):69-75.
- 2) 服部 保ほか (1994) 人と自然4:1-25.
- 3) 浅見佳世ほか (1994) J. Phytogeogr. & Taxon. 42:75-81.
3. 但馬の“幻の蝶” 4題
- 1) 山本広一 (1971) 月刊むし3:2-10.
- 2) 広畑政己・近藤伸一 (1994) 遊蟲千年:1-12.
- 3) 小椋 隆 (1996) ゆらぎあ13:23.
- 4) 永幡嘉之 (1993) IRATSUME17:1-7.
- 5) 永幡嘉之 (1994) IRATSUME18:1-4.
- 6) 広畑政己 (1987) てんとうむし10:11-22.
- 7) 吉富章雄 (1983) IRATSUME7:25.
- 8) 足立義弘 (1983) IRATSUME7:26.
- 9) 渡辺和夫・中村具見 (1996) すずむし129:3-17.
- 10) 山中捷二 (1987) すかしば27:18.
- 11) 広畑政己 (1984) てんとうむし9:18-24.

出石川における キイロヤマトンボ幼虫の採集記録

山崎 喜彦

出石川においてキイロヤマトンボ *Macromia daimoji* 幼虫の生息を最初に確認したのは、1993年7月4日である。出石町寺坂（松神橋下）において、幼虫を砂底より1個体採集した。

幼虫はコヤマトンボやオオヤマトンボによく似ているのであるが、淡黄褐色の地に黒褐色のきれいな体色斑紋があり、大型の幼虫であれば一見して識別できる。

1995年には、出石川の2地点で幼虫の生息が確認された。1つは、10月19日に但東町中山で、幼虫を砂底より3個体採集した。この場所は、赤花川と太田川の合流する場所であり、赤花川側にいくつかの小さな砂底があり、この砂底中より幼虫が採集された。この場所は小さな砂底だけでなく、さまざまな生息環境があり、キイロヤマトンボ幼虫以外にオオカワトンボ、ダビドサナエ、オナガサナエ、アオサナエ、コオニヤンマ、コヤマトンボなどの幼虫も採集された。他の1つは、1993年と同じ出石町寺坂において、10月21日に幼虫を砂底より4個体採集した。その日、寺坂では20数個体のキイロヤマトンボ幼虫の生息を確認したが、他の幼虫は放流した。この場所ではキイロヤマトンボの幼虫以外に、ハグロトンボ、アオサナエなどの幼虫も採集された。1993年の採集場所は松神橋の下流約300mあたりの大きな砂底中であつたが、1995年は松神橋の橋脚のすぐ下流にできた局所的な小さな砂底中であつた。

キイロヤマトンボ幼虫の確認された2地点は、いずれも出石川の中流域に位置し、幼虫の生息環境に適したゆるやかな流れの砂底が広く、そのくぼみに多くの幼虫が生息しているものと考えられる。2地点における幼虫の採集場所は、橋脚のすぐ下流にできた砂の堆積した場所で、採集個体数以外にも多くの幼虫の生息を確認した。橋脚のすぐ下流にできた砂の堆積した場所では、比較的砂底が広がらない地点にも局所的に生息している。このような場所に焦点を当てて調査すれば、キイロヤマトンボ幼虫の生息状況が明らかになっていくものと思われる。

しかし、残念なことに「ひょうご・人と自然の川づくり」整備計画の中に、この出石川（但東町・出石町）が選ばれ、キイロヤマトンボ幼虫の多く生息する寺坂付近の河川を河川公園化する計画が進められている。兵庫県では、出石川を生態系を最優先させた自然型の川に整備する計画であるようだが、寺坂付近は出石川の中で最も自然が豊かな地域であり、改修の必要が疑問視されている。この計画でどのような川になるのか心配である。

また、改修工事に際して長期間にわたり、川底を建設用重機でさわることになるので、土砂の流出や堆積が予想され、急激な生息環境の変化がキイロヤマトンボ幼虫をはじめ、多くの水生生物の生息に多大な影響を与えることが予想される。